

山旅通信【ひとり画つ展】一一〇一号

▼『日本百名山の伝説と神話』（二）

## 利尻山のはなし

「ドンとドンとドンと波のり越えて」



北海道利尻島の利尻山（りしり・標高一七二一m）は、『日本百名山』（深田久弥著）の一番目に書かれている山。利尻郡利尻町と利尻富士町との境にあります。日本最北の山で、利尻岳とも書かれ、島そのものがひとつの山になっています。美しい姿から利尻富士とも呼ばれています。

ここには不思議なことに熊やマムシなどのヘビ類がいないという。深田久弥は『日本百名山』の中で、かつて利尻島南東方向対岸の北海道天塩（てしお）

町で山火事があった時、火事現場から逃れてきたのか熊が泳いで渡ってきて、すみついたことがあったという。しかし、いつの間にかいなくなっていた。たぶんまた古巣へ泳ぎ帰ったのだろう、というようなことを書いています。



山名はアイヌ語の「リ・シリ」の音訳「高い島山」という意味で、となりの低い島山「礼文」に対するもの。この山は、島の中央に山頂を突き上げ、北峰（一七一九m）、本峰、南峰（一七二二m）の三つのピークを持っています。でも北峰から先は崩落が激しく登山禁止になっています。

北峰に利尻郡利尻富士町鴛泊（おしどまり）地区にある利尻山神社の奥社の祠があります。利尻山北ろくには鴛泊ポン山（四四四m）、南麓に鬼脇（おにわき）ポン山（四一〇m）、仙法志（せんほうし）ポン山（三二〇m）などという一風変わった名前の小さな寄生火山もあります。また北に直径二五〇mの姫沼、南麓の沼浦（ぬまうら）には直径四〇〇mのオタドマリ沼、三日月沼が

あり、山の風景に趣をそえて利尻富士観望の地となっています。

この山は古くから高くそびえた美しい姿で、航海や漁場の目印にされ、海の安全を願う人々から崇められたという。しかし姿に似合わずこの山の気象は厳しく、天気が晴れて山の姿があらわすのは、一年のうち一〇〇日もないということです。また利尻山に吹き込む風は「北海の荒法師」とも呼ばれるほど烈しいという。

ここ利尻島には長くアイヌの人たちが住んでいました。ここに初めて和人が入ってきたのは一七〇六年（宝永三）。能登の人、村山伝兵衛が松前藩からソウヤ場所の漁場請負人を命じられて、住みはじめたのが開発の先駆けだそうです。その後一七八七年（天明七）八月にはフランスの探検家、ラ・ペルーズという人が、サハリン島から南下した時、宗谷海峡でこの山を見て、館長のラングルにちなんでラングル峰と名づけたという。

登山の古い記録としては、江戸時代後期の一七八九年（寛政一〇）、武藤勘蔵の『蝦夷日記』のバツカイベツからソウヤへの七月七日の見聞記があり、それによると、最上徳内（もがみとくない・江戸時代中後期の探検家であり江戸

幕府普請役）が記されていてこれが最初らしい。江戸時代後期の一八〇八年（文化五）になり、ロシア武装船の来襲のときには、幕府から出兵を命じられた会津藩士が水腫病にかかり、大勢死亡していった事件もあったといっています。



山頂北峰にある神社の里宮、鴛泊の利尻山神社は、一八二四年（文政七）に建立した神社だという。そののち、山頂に奥社の小祠をまつりました。ついでながら祭神は、オオヤマツミノカミ、オオワツミノカミ、トヨウケヒメノカミを合祀（ごうし）しています。

オオヤマツミは、『古事記』では大山津見（おおやまつみ）と表記され、『伊予国風土記』逸文（いつぶん）という文書では、大山積（おおやまつみ）と書き、大山をつかさどる山神だそうです。また

『日本書紀』では、大山祇（積）と表記し、イザナギ（男神）・イザナミ（女

神)の子。大山をつかさどる山神だそうです。

またオオワタツミは、『古事記』では大綿津見神(おおわたつみのかみ)、『日本書紀』は少童命(わたつみのみこと)、海神(わたつみ)、海神豊玉彦(わたつみとよたまひこ)などと表記。海の三神

の一神で、綿(わた)は海(わた)で、津見は司ることなのだそうです。

さらにトヨウケヒメは、『古事記』では豊宇気毘売神(とようけひめのかみ)、『日本書紀』では豊受気媛神(とようかひめのかみ)、豊受大神(とようけのたいじん)などと書き、イネの精霊の神格化したもののようです。つまりこの祠には、山と海と食べ物(イネ)の神さまをまつたのでしょう。

山頂の三角点(点の名称「利尻絶頂」)は、一九一二年(大正元)五月に陸地測量部の技師井口貫一によって選点されたものという。さらに一八七一年(明治四)日本政府の招きで開拓使顧問として来日した、アメリカの農政家、ケプロンが書いた「ケプロン報文」(来曼北海道記事)には「バツカイ(稚内市の

地名）近傍ノ海浜通り数英里ノ間、殆ド円錐状ニシテ、四側平等ナル利尻山ノ美景ヲ眺望シツ、経過セリ」と利尻山を見ながら航海していたことが記されています。

利尻山の登山道を開いたのは修験者

天野磯次郎という人物。一八九〇年（明治二三）ころ、駕泊（おしどまり）からの登山道をつくったのが最初だという。明治後期になると、植物学者牧野富太郎も植物採集のためこの山を訪れています。

また「♪山は白銀、朝日を浴びて・

・」の詩でおなじみの『スキーの歌』の作詞家、時雨音羽がこの利尻出身。

彼は利尻山について「山は世界に山ほどあれど海の銘山これひとつ」と詠んでいます。島の杓形岬公園には彼の「ドンとドンとドンと波のり越えて一挺二挺三挺八挺櫓で飛ばしや・・・」という『出船の港』の歌碑もあります。



利尻山は、古くは利後（りいしり）山と呼ばれたという。この山について民俗学者、吉田東伍は、「（現代文で書くと）島の中央に屹立する休火山にして、洋名をランタンという。壮麗なる円錐形をなして裾を四方に延ばし、遠くこれを望めば、さながら富岳のようである。よって北見富士の名称がある。山ろくはおおむね樹林をもつて覆われ、四合目以上は全く火山質の石礫（せきれき）をもつて覆われている」というような紀行文を残しています（『日本山岳ルーツ大辞典』）。

ここは高山植物でも名高いところでもあります。緯度が高いために本州では標高二〇〇〇mあたりに生息する高山植物が、利尻島では平地に平気な顔をして？生えています。ここの固有種のリシリヒナゲシ、ボタンキンバイ、リシリオウギ、リシリトウウチソウなど、利尻の名を冠した種も多く、南斜面に群生するチシマザクラは、一九六八年（昭和四三）道天然記念物に指定されました。

また三合目、姫沼分岐近くにわき出る寒露泉は一九八五年（昭和六〇）の「日本名水百選」（環境庁）のなかで一番北の名水になっています。この名水は、サケのふ化事業にも利用されています。

## ▼利尻岳【データ】

### ★【所在地】

・北海道利尻郡利尻町と利尻富士町との境。JR宗谷本線稚内下車、稚内港から船で二時間で鴛泊（おしどまり）からタクシーで利尻北麓野営場、さらに歩いて六時間で利尻岳（利尻山）北峰。二等三角点亡失（一七一八・七m・二〇一一年一〇月一三日）と利尻山神社奥宮がある。そこから二三〇mほど南の南峰に写真測量による標高点（一七二一m）がある。

### ★【位置】

- ・北峰二等三角点（亡失）…北緯四五度一〇分四九・六四秒、東経一四一度一四分二八秒
- ・南峰標高点…北緯四五度一〇分四二秒、東経一四一度一四分三一秒

### ★【地図】



・二万五千分一地形図名…鴛泊

▼【参考文献】

- ・『角川日本地名大辞典一・北海道（上）』（角川書店）一九九一年（平成三）
- ・『神々の系図』川口謙二（東京美術）一九八一年（昭和五六）
- ・週刊日本百名山三三一・利尻岳、羅臼岳』（朝日新聞出版）二〇〇八年（平成二〇）

- ・『新日本山岳誌』日本山岳会（ナカニシヤ出版）二〇〇五年（平成一七）
- ・『日本山岳風土記三・富士とその周辺』（宝文館）一九六〇年（昭和三五）
- ・『日本山岳ルーツ大辞典』村石利夫（竹書房）一九九七年（平成九）
- ・『日本山名事典』徳久球雄ほか（三省堂）二〇〇四年（平成一六）
- ・『日本百名山』（新潮文庫）深田久弥（新潮社）一九七九年（昭和五四）
- ・『日本歴史地名大系一・北海道の地名』高倉新一郎ほか（平凡社）二〇〇三年（平成一五）ほか

.....

【とよだ 時】

★ アマゾン本・作者コーナー

<https://www.amazon.co.jp/stores/author/B004L1SDTE>

★ My books ほか

<https://toki.moo.jp/baiten/baiten.html>

★ グッズ・SUZURI 社

<https://suzuri.jp/toki-suzuri/products>

